

日文研究室だより

一九九七年

会長 木村 一信

今年の四月から、理工学部だけであったびわこ・くさつキャンパスに、経済・経営の二学部が移転いたしました。これで、立命館大学の半数近くの学生が草津市にて学び、残りが京都市の衣笠キャンパスということになります。この移転に伴い、理工・経済・経営の三学部では、文理総合インスティテュートという新しい形態のカリキュラムが実施され、また一つの改革がおこなわれたこととなります。

二〇〇〇年に、大分県別府市に開設される予定の立命館アジア太平洋大学構想、また目下検討の始められた衣笠キャンパスでの新学部設置あるいは文学部内の改革など、しばら

くはこうした動きが続きそうな気配があります。

しかし、こうした気ぜわしい動きの中で忘れてはならないのは、あたりまえのことですが、いかに教育と研究とにむける専門性の質を高め、あわせて広い視野を獲得して進むことができるかということでしょう。

改革は、改善をめざすわけですから、学生、教員の双方にとって向上につながる大学改革は受け入れられません。旧来に固執するのではなく、新しい時代・社会の要望に柔軟に対応しながら、これまで培ってきた方法と内容をさらに吟味して高めていくような改革に組みたいものです。

昨年、ご定年により特任教授となられた福田晃先生の「中世文学」のポストに、大阪大学文学部の助手を勤めておられた中本大先生を、この

四月より専攻にお迎えいたしました。中本先生は、中世和歌、漢籍を専門とされており、五山文学や日中比較漢文学なども研究されています。専攻におけるもつとも若い年齢の先生で、その活躍が期待されます。

日本文学会の各パートの活動など、このあとのページをご覧くださいければわかりますが、大変活発に行われています。それぞれの部門の責任者、お世話下さっている各委員の方々のご努力と参加者の熱意によるものでしょう。日頃のこうした地道な活動が、やがて大きな成果を生むものと確信しております。